経済論叢（京都大学）第190巻第1号，2016年7月

〈論　文〉

貨幣の起源と物々交換（1）
――ロー，マルクス，メンガー――

古　川　　顕*

Ⅰ　はじめに

本稿は貨幣の起源を物々交換に求める代表的な理論を取り上げ，体系的に考察する。貨幣の起源については従来，経済学はもとより，社会学，民俗学，歴史学，考古学，経済・文化人類学など，さまざまな観点から活発な議論が展開されてきた。そのなかで，おそらく最も伝統的で中心となる考え方は，物々交換に基礎をおく貨幣生成論であろう。この理論の背後には，物々交換は貨幣経済に先行するという見方が暗黙の前提とされ，貨幣は物々交換の困難を取り除いて財の交換を容易にするための手段（交換手段）として生じたという推論であると思われる。以下では，原初的な物々交換との関連で貨幣の起源を説明する見解に即して，貨幣の起源についての問題を検討する。

まず次節では，ある財と他の財を直接に交換する場合（直接交換）の問題点を考え，これとの比較で財と財の間に交換を媒介する手段としての貨幣が存在する場合（間接交換）について検討し，貨幣の存在意義について改めて考察する。第Ⅲ節では，17世紀末から18世紀初頭に活躍したジョン・ロー（John Law，1671–1729）の貨幣起源論を取り上げる。ローは「信用創造論の創始者」とされ，また「貨幣起源論の創造者」ともいわれる破天荒の経済理論家として知られている。第Ⅳ節と第Ⅴ節では，やはり物々交換の観点から貨幣の起源の問題に取り組んだ19世紀の2人の巨人，カール・マルクス（Karl Marx，1818–1883）とカール・メンガー（Carl Menger，1840–1921）の貨幣起源説を俎上に載せ，彼らの独創的な考え方を明らかにする。とりわけメンガーの理論は，現代のミクロ経済学の先端的理論にも無視できない大きな影響を与えている点で重要であると思われる。最後に第Ⅵ節では，それまでの議論と結論を要約するとともに，物々交換に起因する貨幣生成論の問題点についても触れることにしたい。

Ⅱ　直接交換と間接交換

貨幣が経済活動に及ぼす影響についてはさまざまな考え方があるが，おそらくかなり極端な見解の一つは，A. C. ピグーのそれであろう。そのことは，次の引用からも明らかである。「それら［貨幣的事実および出来事］は，“現実の”事実および出来事とは異なっており，これらとは違って，それらは経済的福祉に対してなんら直接の意味を有していない。現実の事実および出来事を取り去ると，貨幣的事実および出来事は必然的に消え去ってしまう。しかし貨幣を取り去ると，他のどんな事柄が生じようとも，経済生活は無意味とはならないだろう。まったく貨幣のない自己充足的な

＊　京都大学名誉教授

家族，あるいは村の集団という概念ほど馬鹿げたものは何もない。この意味で，貨幣は明らかにヴェールである。それは何ら経済生活の本質的要素を構成しない」（Pigou［1950］pp. 24–25，傍点は原文ではイタリック）。いわゆる貨幣ヴェール説といわれるもので，このピグー晩年の本のタイトル自体が *The Veil of Money* となっている。しかし通常は，貨幣はヴェールではなくて実体経済に何らかの有意の影響を及ぼすと考えられてきた。

アダム・スミスの『国富論』は，かなり早い時点でのこうした見解を代表する。スミスは，『国富論』において周知の経済発展における分業の重要性を指摘し，分業の確立は必然的に交換を生み出すという。「分業というものは，こうした広い範囲における有用性には無頓着な，人間の本性上のある性向，すなわち，ある物を他の物と取引し，交易し，交換しようとする性向の，緩慢で漸進的ではあるが，必然的な帰結なのである。いったいこの性向は，これ以上は説明できない，人間性にそなわる本能の一つなのか，それとも，このほうがいっそう確からしく思われるが，理性と言葉という人間能力の必然的な帰結なのか……。この性向はすべての人間に共通なもので，他のどんな動物にも見出されないものである」（Smith［1789］邦訳24ページ）。カール・メンガーはこのスミスの一文を引いて，「これらはアダム・スミスが未解答のまま残した疑問である」（Menger［1871］邦訳131ページ）と述べている。

スミスの分業論をもう少し追ってみよう。スミスはいう。「分業がひとたび完全に確立すると，人が自分自身の労働の生産物によって満たすことのできるのは，かれの欲望のうちのごく小さい部分にすぎなくなる。かれは，自分自身の労働の生産物のうち自分自身の消費を上回る余剰部分を，他人の労働の生産物のうち自分が必要とする部分と交換することによって，自分の欲望の大部分を満たす。このようにして，だれでも，交換することによって生活し，言い換えると，ある程度商人となり，そして社会そのものも，まさしく商業的社会とよべるようなものに成長するのである」（Smith〔1789〕邦訳39ページ）。

ただし交換が成立するためには，取引当事者の間で，自分が欲するものを相手が所有すると同時に，相手が欲するものを自分が所有するという状況，いわゆる「欲求の二重の一致」（double coincidence of wants）が成立することが不可欠である。スミスの言葉に従えば，「ある人がある商品を自分で必要とする以上にもっているのに，他の人はそれをもっていない，と仮定しよう。すると前者は，この余剰物の一部をよろこんで手放し，後者もそれをよろこんで購買するだろう。ところがもしこの後者が，前者が必要とするものをたまたまなにももっていないなら，かれらのあいだにはどんな交換も行われるはずはない」（*Ibid.*，邦訳40ページ）。そして，こうした物々交換の不便を回避するために貨幣が登場する。「このような事態の不便を避けるために，社会のあらゆる時代の世事にたけた人たちは，分業がはじめて確立されたあと，おのずから事態を次のようなやり方で処理しようとつとめたにちがいない。すなわち，世事にたけた人は，自分自身の勤労の生産物と交換するのを拒否しないだろうと考えられるような，なんらか特定の商品の一定量を，いつも手元にもっているというやり方である」（*Ibid.*）。この特定の商品が，一般的受容性を有する交換手段としての貨幣であることはいうまでもない。

スミスはこのようにして「貨幣の起源」について説明し，具体的に貨幣の役割をはたしたものとして，社会の未開の時代の家畜に始まり，金属貨幣が長期にわたって用いられるようになった経緯について詳細に検討する。そして，「貨幣がすべての文明国民において商業の普遍的用具となったのは，このようにしてであって，この用具の媒介によって，すべての種類の財貨は売買され，相互

に交換されるようになったのである」（*Ibid*., 邦訳 48 ページ）と結んでいる。以上のように，スミスにおいては，貨幣は物々交換の不便を克服する手段として登場し，「流通の大車輪」（*Ibid*., 邦訳 442 ページ）として経済の発展に大きく寄与したとみなすのである。こうした考え方が踏襲され，現代における「貨幣の起源」についての標準的な見方を形成しているように思われる。

スミスに先立ち，J. ハリスの言葉も紹介しておこう。「貨幣とは，それによってあらゆる物の価値が規制され確定されるところの標準尺度であり，しかも同時に，それ自体，それによって諸商品が交換されそれをもって契約の支払いが行われるところの，価値ないし等価物である。それゆえ，貨幣はあとで受け戻されるべき担保ではなく，あらゆる契約において交換の尺度であるばかりかふつうには交換の当の目的物であるということによって，同時に等価物でも尺度でもある。言い換えれば，一つの物が他の物と交換される場合，その交換の尺度はふつう，交換される物のそれぞれが値する貨幣の量である」（Harris［1757–1758］邦訳 36–37 ページ，傍点は原文ではイタリック）。このようにハリスは交換における価値尺度としての貨幣の機能を重視する。

ところで，交換という観点から人間の歴史を振り返ると，およそ 3 つに分類することができる。第 1 は，交換の行われない自足自給経済，第 2 は，物と物とを直接交換する物々交換経済，第 3 は，貨幣が媒介となり，間接的に交換する間接交換経済（貨幣経済）である。間接交換が可能であるためには，交換しようとする人々の間で，誰もその受け渡しを拒まず，すべての財のなかで最も受容されやすい特定の財が生成することが必要である。こうした一般受容性を有する財が一般的交換手段，すなわち貨幣として用いられる。この場合，物々交換とは，ある商品（W）と別の商品（W）との直接交換（direct exchange）であり，これに対して間接交換（indirect exchange）とは，ある商品（W）が最初に貨幣（G）と交換され，次に貨幣が別の商品（W）と交換される，つまり $W-G-W$ と表現される形態である。

直接交換と間接交換の違いは，表面的には，ある商品と別の商品の交換を貨幣が仲介するか否かにほかならないけれども，この違いは現実にはきわめて大きい。この点を分かりやすく説明したのが W. S. ジェヴォンズである。彼は次のように指摘する。「現代の文明社会では，交換の原始的な方法の不都合はまったく知られていないものであり，ほとんど仮想上のものに見えるかもしれない。われわれは最も古くから貨幣の利用に慣れており，貨幣がわれわれに与える計り知れない恩恵に気付いていない。そして，まったく異なった社会状態を思い浮かべるときにのみ，貨幣が存在しない場合に生じる諸困難をはっきり理解することができる」（Jevons［1875］p. 2）。彼は，物々交換に伴う困難として，①欲求の二重の一致の欠如（want of double coincidence），②価値尺度の欠如（want of a measure of value），③分割方法の欠如（want of means of subdivision）の 3 つを挙げている。

物々交換が成立するためには，先に触れた「欲求の二重の一致」がみられることが不可欠である。しかし，「物々交換の行動を許容するためには，［欲求の］二重の一致がなければならないけれども，そのことは滅多に生じない」（*Ibid*., pp. 3–4 傍点は原文ではイタリック）。なぜなら，こうした状況が成立するためには，当然のことながら，誰が何を保有し，何を必要としているかについて正確な情報が事前に与えられていなければならない。しかし，交換が成立するのに必要な情報を集めるためには，時間ないし労苦という尺度で測られる多くの費用をみずから負担しなければならない。さらに，交換手段が存在しないならば，こうした情報収集の費用に加えて，取引対象物が腐敗・損耗しないように維持・管理し，取引の場所へ運搬する労力や時間という費用も無視できない。貨幣

は，例えばある特定の財 A と別の財 B との直接的な交換に伴う無視できない費用を大幅に節約する。

ひとたび物々交換経済に貨幣が導入されると，欲求の二重の一致という厳しい制約は取り除かれる。上の例を用いると，財 A の所有者は A を売って貨幣という一般的受容性を有する交換手段を受け取り，それを用いて別の財 B を購入すればよい。かくて貨幣は，それが存在しない状況のもとでの交換に必要な情報量，あるいは取引を実現するのに必要な費用（取引費用）を大幅に節減することによって，物々交換に伴う偶然性・局所性を克服し，社会的な交換の可能性を飛躍的に増大させる。無数の財が分業によって生産され，それが交換の過程を通じて分配される経済システムは，交換を媒介とする手段としての貨幣の存在なしには到底考えられない。こうした財の交換を媒介する貨幣の機能を交換手段（medium of exchange）と呼んでいる。これは，財の購入が貨幣との交換の形をとってなされるように，貨幣がその社会の成員によって承認された手段として，あらゆる経済取引の対象と交換される働きを指している。ジェヴォンズが物々交換の困難の第1に指摘する要因は，こうした交換手段の不在による「欲求の二重の一致の欠如」である。

ジェヴォンズのいう物々交換の困難をもたらす第2の要因は，「価値尺度の欠如」である。貨幣は，交換手段に加えて，財の市場価値を表す共通の尺度として働く。これが価値尺度（measure of value）ないし計算単位（unit of account）としての貨幣の機能である。もし，こうした価値尺度が存在しないならば，個々の財の価格は他のあらゆる財の数量をもって表現されねばならないから，無数の交換比率が生じ，現実の取引は複雑をきわめる。

例えば，いま取引される異なった財の数が100個あるとしよう。このとき，統一の価値尺度財（ニュメレール）が存在しないならば，それぞれの財1個につき99種類の交換比率が生じるから，重複を除くと，全体の交換比率は4950の数にも達する（$99\times100\div2$）。ところが，100個の財の価格がある特定の価値尺度財の数量で測られるとすると，交換比率は99個にまで減少する。一般的にいえば，取引される財の数が n 個であれば，価値尺度が存在しない場合の交換比率は $n(n-1)/2$ 個であるのに対し，特定の価値尺度が導入されると，その数は $n-1$ 個にまで減少する。このように，貨幣は価値尺度としての機能を兼ね備えることによって，複雑な交換取引を円滑にする役目をはたしている[1)]。

ジェヴォンズが「物々交換の第3の，しかしあまり重要でない不便は，多くの種類の財を分割することの不可能性から生じる」（*Ibid.*, p. 6）と指摘する「分割方法の欠如」の問題である。彼の用いた例によれば，洋服の仕立屋はすぐ交換に出せる1着のコートをもっているが，彼はパン屋からパンを欲するか，あるいは肉屋から肉を得たいと考えているものの，コートの価値はパンや肉の価値よりもずっと大きいというケースである。この場合，仕立屋はパンや肉の価値に見合うように，コートを切り裂いてその一部を交換することはできない。彼はそのコートを一時的に何らかの交換手段に変換し，その交換手段の一部を用いて彼の欲するパンないし肉を入手することが必要となる。「われわれは，そのさまざまな必要に応じて価値を分割し，分配する手段を必要とするのは明らかである」（*Ibid.*）。物々交換の困難を助長する要因の一つは，以上のような財の不分割性であり，それを克服するためにも貨幣を必要とするとジェヴォンズは主張するのである[2)]。

1）古川［2014］第1章第4節20ページを参照されたい。

2）厳密に言えば，ジェヴォンズは貨幣の特質の種類およびその重要性の順序として，次の7つを挙げている。

Ⅲ　ジョン・ローの貨幣起源論

数奇な運命をたどり，波乱万丈の人生を送ったスコットランド人ジョン・ローではあるが，経済理論家として大きな業績を残している。そうした業績の一つとして，彼の独創的な貨幣起源論を見逃すことはできない。貨幣がどのような役割をはたすのか，貨幣は何からできているのか，貨幣がどのようにして出現したのかという問題，すなわち貨幣の機能と貨幣の素材，貨幣の起源にかかわる問題は密接に関連し，これらは三位一体化しているといってもよいように思われる。ローは『貨幣と交易の考察』という小冊子（Law〔1705〕）において，経済学の歴史に残る貨幣理論を展開している[3)]。

貨幣生成論は，ギリシャの哲学者アリストテレス（紀元前384–同322）や17世紀の自然法哲学を代表するドイツの思想家プーフェンドルフ（1632–1694）などによって最初に提唱された。アリストテレスは，貨幣はその共同体的社会を構成する人々の「申し合わせ」，あるいは「社会的合意」に基づいて人為的に創造されたと主張する。この貨幣の起源に関する考え方は，やはり貨幣の起源を共同体における人々の合意ないし契約に求めたプーフェンドルフなどによって踏襲され，こうした貨幣起源説は長きにわたって支配的な見解をなしてきた[4)]。

これに対し，アリストテレスやプーフェンドルフの社会的合意説ないし契約説という人為的な貨幣起源説と正反対の考え方を最初に打ち出し，貨幣が物々交換の困難を克服するために自然発生的に生じたとの考え方を提起したのはジョン・ローである。ローの見解を検討する前に，彼とほぼ同時代に活躍したジョン・ロックの貨幣起源説に立ち寄ってみよう。

プーフェンドルフと同年生まれで，イギリス経験哲学の創始者とされるジョン・ロック（1632–1704）も，貨幣の起源についてアリストテレスやプーフェンドルフと同様の見解を示している。彼は，『利子の引き下げおよび貨幣の価値の引き上げの諸結果に関する若干の考察』という長いタイトルの著作において次のように述べている。「貨幣は［経済活動に従事する］これらすべての人々にとって計算用具および保証物の両方に役立つものとして必要である。すなわち，それでむらのない均一の計算を行ない，また貨幣を受け取る者に，彼がそうしたい時にはいつでも，その貨幣と交換に彼の欲する同一の価値の他の物を再び手に入れさせるという保証を付与するものとして必要である。これらのうち前者は，刻印と呼称によってなされ，後者はその内在的価値，すなわち貨幣の分量によってなされる」（Locke［1691］邦訳31ページ，傍点は原文ではイタリック）。ロックは，貨幣が貨幣として機能する必要条件として，素材としての均一性と，「貨幣と交換に彼の欲する同一の価値の他の物を再び手に入れさせるという保証を付与する」という条件を提示する。

ロックは，貨幣がその社会を構成する人々の「同意」もしくは「一般的合意」によって生み出されるという。「人類は金銀に，その耐久性と稀少性，およびたやすく偽造されにくいという理由で，

---

①効用と価値（utility and value），②運搬の容易性（portability），③摩耗しないこと（indestructibility），④均質性（homogeneity），⑤分割可能性（divisibility），⑥価値の安定性（stability of value），⑦識別可能性（cognizability）。

3）ジョン・ローについて詳しくは，古川［2015a］，同［2015b］を参照のこと。

4）本稿第Ⅲ節は，古川［2015a］の第3節を一部修正してジョン・ローの貨幣起源説を中心に検討しているが，アリストテレスやプーフェンドルフなどの貨幣起源説についても簡単に論じている。近い将来，アリストテレスやプーフェンドルフなどの貨幣起源説について詳細に検討する予定である。

想像的価値（imaginary Value）を与えることに同意し，一般的合意（general consent）によって金銀を共通の保証物にしたのである。それによって人々は，金銀と交換に，これらの金属の任意の分量の代わりとして，手放したものと等価値の物を受け取ることを保証されるのである。こうした方法によって，共通の交易品とされたこれらの金属において内在的価値とみなされるものは，人々がやり取りする金属の分量にほかならないことになる。すなわち，これらの金属は，貨幣としては，人が必要としたり欲したりするものを手に入れるための保証物として以外の価値をもたず，しかも，これらの金属が，われわれが必要としたり欲したりするものを獲得するのはその分量によってのみであるから，商業に使用される金銀の内在的価値はそれらの分量以外の何ものでもないことは明らかである」（*Ibid*., 邦訳31–32ページ，傍点は原文ではイタリック）。

さらにロックは，『貨幣の価値の引き上げに関する再考察』という冊子において，次のように付け加える。「銀は，世界のあらゆる文明化された交易を営んでいる地域における，商業の道具であり尺度である。それはその内在的価値によって商業の道具となる。貨幣とみなされる銀の内在的価値は一般的同意が銀に与えるその評価にあり，それによって銀は他のあらゆる事物に対して等価物になり，その結果それは，人々が高価な代償を払って購入したり手放したりしようとする他の諸物品と交換に授受する普遍的交易品または交換手段となる。かくして賢者が言うように，貨幣は万能である（*Money answers all things*）」（Locke［1695］邦訳31ページ，傍点は原文ではイタリック）[5)]。

もっとも，ほぼ同時代の“2人のジョン”の間には大きな考え方の相違，というよりも対立する正反対の見解が存在する。すなわち，ジョン・ローは貨幣が人々の「合意」，「契約」あるいは「協定」などによって人為的に創造されたというよりも，物々交換の困難を克服するために自然発生的に生じたと主張する。ローは次のようにいう。「貨幣の使用が知られる以前には，財は物々交換ないし契約によって交換され，契約は財の形で支払いがなされた。このような物々交換の状態は不便であり，不利であった。第1に，物々交換を望む人は必ずしもその人が保有する財を望む人々を見出すとは限らないし，第2に，財で支払いがなされる契約は，同じ種類の財といえども価値が異なるがゆえに不確実である。第3に，財相互間の価値の比率を知ることのできる尺度がない」（Law［1705］p. 5）。「このような物々交換の状態では，ほとんど交易がなく，職人も存在しなかった。人々は土地所有者（landed-men）に依存した。土地所有者は，彼らの家族に役立つように，その土地では産み出さない必需品と交換するため，そして種子を蓄えたり凶作に備えるためにしかその土地の多くを耕作しなかった。残りの土地は未耕作のままにしておくか，あるいは臣下として隷属したり，その他のサービスの提供を条件として贈与した。物々交換に伴う損失や困難のために，土地所有者はより多く彼ら自身の生産物を消費し，他の財の消費をより少なくしなければならないであろう。……こうして多くの土地は耕作されず，耕作された土地も最も有利となるようには使用されず，人々も彼らが最も適した仕事には向けられなかった」（*Ibid*., pp. 5–6）。こうしてローは，物々交換システムは非効率的な経済システムであるという結論を導いたのである。

他方，ローは銀を貨幣として用いる5つのメリットを指摘する。①銀はその品質が確実で，価値の標準として適している。②引き渡しが容易である。③場所の如何にかかわらず同一の，あるいはほとんど変わらない価値をもち，持ち運びが容易である。④広い場所を占めず，耐久性をもってい

5）周知のように，この引用文における「貨幣は万能である」とは，Vanderlint［1734］の書名に由来するものであり，「賢者」とはもちろんヴァンダーリントを指している。

るから，損失や費用なしに保有しうる。⑤損失なしに分割することができる。「貨幣はこうした品質をもっているので，それが鋳造されなくても貨幣として用いられると考えるのは当然である。貨幣として用いられるとは，銀地金が財の価値を評価する尺度であり，その尺度によって財が交換され，契約が履行されるという意味である」（*Ibid.*, p. 7）。ローは「貨幣に必要な性質を有する他のいかなる財も，安全性と便宜さをもって，それらの価値に等しい貨幣となりうるのは明らかである」（*Ibid.*, p. 60）。「貨幣はそれによって財が評価される尺度であり，それによって財が交換され，契約が履行される価値である。貨幣は保証（pledge）であるという人もいるが，そうではない。それは支払われるか，あるいは支払いが契約された価値である。……すなわち貨幣は，それを受け取っても契約しても，あるいはそれによって財を評価しても，最も確実な価値をもち，最も価値の変動の少ないものである。［これに対して］銀貨はその価値において他の財よりも不確実であり，貨幣の使用にとってより不適切なものである」（*Ibid.*, pp. 61–62）。「貨幣は財がそれと交換される価値ではなく，それによって財が［相互に］交換される価値である（Money is not the value for which goods are exchanged, but the value by which they are exchanged）。貨幣の使用は財および銀を購入することにあり，貨幣はそれ以外何の役にも立たない」（*Ibid.*, p. 100）ともいう。

ロー研究の第一人者マーフィーは，この記述における「彼の貨幣の定義における前置詞‘for’の前置詞‘by’の置き替えが貨幣経済学のまったく新しい眺望（vista）を切り開いたのである」（Murphy［2009］p. 217）とローの卓越した業績を賞讃する。マーフィーは，「あらゆる財はその価値が変動を受けやすい。その価値が最も確実である，あるいは最も変動の少ない財は，最も貨幣となる資格がある」（Law［1994］p. 58）というローの言葉を引用して，「価値の相対的安定性は，貨幣として選択される基本的な要件であった。ローの見解では，銀はこの基準に適切には合致しなかった。というのは，銀貨は価値の継続的な下落にさらされていたことは歴史の示すとおりである。その価値は，①需要に対する銀の世界的な過剰供給，②欧州の君主たちによる銀貨の改悪，のために低下したからである」（Murphy［2009］p. 34）と指摘する。

ところで，ローが「貨幣経済学のまったく新しい眺望を切り開いた」というマーフィーの指摘は，一体何を意味するのだろうか。その意味するところは，貨幣は金や銀のように素材自体が価値をもつ金属貨幣である必要はまったくなく，一般的交換手段として機能するものは何であれ貨幣であるというものである。一国の貨幣システムが金や銀の予測しがたい生産量に縛られるのは不合理であり，金属貨幣を紙券貨幣や銀行信用に代替させるほうが望ましいというのがローの本意である。そうしたローの考え方は，「あらゆるものは，その使用から価値を生じる。その価値は，そのものの品質，供給，需要に応じて変化する。異なった種類の財が今日同じ価値であるにしても，その品質，需要，供給にどのような不均等な変化が生じても，その価値は変わるだろう（Law［1705］p. 83）という認識に支えられている。

ローは，あらゆる財の価格は，その需要と供給によって決定されるという基本的な考え方（需給説）に立脚している[6)]。そうした見解は，貨幣についても妥当するという。こうしたローの見解は，貨幣とはそれ自体価値である商品であるという「貨幣商品説」を脱して，貨幣の素材や形態とは無関係に，貨幣としての機能をはたすものが貨幣であるとの「貨幣機能説」の立場を鮮明にする。この見解は，F. A. ウオーカーの「貨幣とは貨幣のなすところのものである」（*Money is that money*

6）ジョン・ローの需給説については，古川［2015a］第2節を参照されたい。

does）（Walker［1878］p. 405）という現代の貨幣論の標準的な考え方と通底する。

ウオーカーは上述の見解に先立って，「貨幣は，債務の最終的決済および財の完全な支払いにおいて人々の手から手に渡るものである。銀行の預金システムは大量の債務の相互決済を可能にし，この働きがなければ現実の交換手段の介入が必要となる。しかし，預金はそのような手段ではない。一言でいえば，預金は他のあらゆる信用形態と同様，貨幣の使用を節約する。それらは，貨幣の機能をはたさない」（*Ibid.*）と述べ，「貨幣とは，貨幣のなすところのものである」と断じるのである。J. R. ヒックスはこのウオーカーの見解を踏襲して，「貨幣はその機能によって定義される。すなわち貨幣として使われるものは何であれ貨幣である。換言すれば，『貨幣とは貨幣が行うことである』（Money is what money does）」（Hicks［1967］p. 1）という[7]。

もっとも，預金が貨幣の機能をはたさないというウオーカーの指摘が，現在に妥当しないのは明らかであろう。貨幣の概念は，金融の技術革新や人々の支払い習慣の変化などに応じて絶えず変化するのである。

ともあれ，ジョン・ローは貨幣の起源をアリストテレスやプーフェンドルフに代表される「社会的合意説」あるいは「社会的契約説」に抗して，それを「自然発生説」に求めたのである。ロー以降，「貨幣の起源」という難題はさまざまな観点から考察されてきたが，いまだ確固とした明確な結論が得られないまま現在に至っている。だが，おそらく彼が最初に提起したと思われる「自然発生説」は，今なお最も有力な仮説の一つとみなされていることは否定できないように思われる[8]。

それに劣らず重要なのは，貨幣は金や銀のように素材自体が価値をもつ商品，すなわち金属貨幣（あるいは商品貨幣）である必要はなく，一般的交換手段として機能するものは何であれ貨幣であるという当時としては画期的な考え方を提起したことである。このローの見解も，現代の経済学の常識として受け継がれている。

Ⅳ　マルクスの貨幣起源論

1　伝統的な物々交換説

マルクスの貨幣起源論は，『資本論』に先立つ『経済学批判序説』や『経済学批判要綱』において比較的分かりやすく説明されている[9]。以下，それらに従って彼の貨幣起源論を見てみよう。

まず『経済学批判序説』において，マルクスは次のように述べている。「貨幣は熟慮や合意の結果ではなく，交換の過程で自然に生まれ出たものであるから，多くの異なった，多かれ少なかれ不

7）ここに触れたように，“Money is what money does”という言葉は，ヒックスが最初に用いたのではなく，Walker［1878］が最初に用いている。ただし意味は同じであるが，正確に言えば，Walker では“*Money is that Money does*”となっている。なお，ヒックスはこの表現がウオーカーに負うことを明示していない。この点は，古川［2012］12ページおよび同［2014］29–30ページ，注14ですでに指摘している。

8）メンガーはローに対し次のように評価する。「ローは断乎として合意説を退け，残余の商品中における貴金属の特異な地位を認識し，その貨幣としての性格をこの特異性から発生的に説明することを認識し（これは彼以前の誰もなし得なかったところである），それにより彼は貨幣の起源の正しい理論の創始者（the founder of the correct theory of the origin of money）となっている」（Menger［1871］邦訳226–227ページ，傍点は引用者）。まさに激賞すると言ってもよいだろう。なお，引用文中の英訳は，Menger［1976］p. 318に依っている。

9）『経済学批判』における貨幣生成説の内容は『資本論』とほぼ同じなので，ここでは省略する。

適切な商品がさまざまな時代に貨幣として用いられた。交換がある発達の段階に達すると，さまざまな商品の間の交換価値と使用価値の機能を分離させる必要が生じ，それによって例えば，ある商品が交換手段として働く一方，別の商品が使用価値として用いられるようになる。その結果，最も共通の使用価値を表わす一つの商品あるいは時々はいくつかの商品が時折，貨幣として役立つようになる」（Marx［1970］p. 49，傍点は引用者）。

マルクスはそうした貨幣の生成に関して，以下のような具体的な説明を加える。「商品の交換は元来，原始的な共同体の内部ではなく，彼らが他の共同体と接触するようになる彼らの共同体のわずかな境界部分，その周辺部に発生する。これは物々交換が始まり，そこから共同体の内部に移動し，共同体を崩壊させるように働く場所である。異なった共同体間の物々交換の結果として，商品，例えば，奴隷，牛，金属が通常，これらの共同体の内の最初の貨幣として役立つ商品となる。物々交換の漸進的な発展，交換取引の回数の増加および交換される商品の種類の増加は，それゆえ交換価値としての商品のいっそうの発展を導き，貨幣の生成を刺激し，結果として直接交換を崩壊させる効果をもたらす。経済学者は通常，貨幣の出現は物々交換の拡大が遭遇する外的な諸困難のせいであると推論するが，彼らはこれらの諸困難は交換価値の発展から生じ，それゆえ普遍的な労働としての社会的労働の発展から生じることを失念している」（*Ibid*., pp. 50–51）。

次に，『経済学批判要綱』に目を転じよう。マルクスは次のような見解を披露する。「国家が協定によって発生しないのと同様，貨幣は協定によっては発生しない。貨幣は，交換から交換のなかで自然発生的に生じており，交換の所産である。……すなわち，欲望や消費の対象ではなく，ふたたびそれを他の商品と交換するために交換に持ち込まれる，塩，毛皮，家畜，奴隷がそのような商品であった。そのような商品は，実際上商品としての特殊な形態において，他の商品よりも交換価値としての自分自身に適合している」（Marx［1857–1858］邦訳 86 ページ，傍点は引用者）。すなわち，貨幣は人為的な産物ではなく，人々の交換を通じて自然発生的に生成するという伝統的な見解が述べられる。

これに続いてマルクスは次のようにいう。「商品の特殊な効用――特殊な消費対象（毛皮）としてであれ，直接的な生産用具（奴隷）であれ――が，ここでは商品に貨幣という刻印を捺している。ところが発展が進むにつれて，まさにその反対のことが生じてくるだろう。すなわち直接に消費の対象であったり，または生産の用具であったりすることの最も少ない商品が，交換そのものの必要に最も役立つようになるだろう。前者の場合には，商品はその特殊な使用価値のゆえに貨幣となり，後者の場合には，商品が貨幣として役立つことからその特殊な使用価値を獲得する。永続性，不変性，可分性，再合成の可能性，商品が大きな価値をわずかの体積のうちに含んでいることによる相対的に容易な運搬可能性。これらすべてが貴金属を最後の段階にとくに適合させる」（*Ibid*., pp. 86–87）。この一文では，何らかの商品が貨幣となる 2 つの段階が想定される。第 1 の段階は，商品として選択される使用価値の大きさにかかわるもので，ある商品が消費の対象物あるいは生産用具として最も役立つという事実によって貨幣として選択されるというものである。それに対して第 2 の段階は，第 1 の段階とは逆に，ある商品が消費においても生産においても最も少ない効用をもっているという理由のために，貨幣として選ばれるというのである。

以上の貨幣の起源に関するマルクスの見解は，『資本論』第 1 巻において，より詳細かつ洗練した形で論ぜられる。「貨幣形態は，外部の共同体との最も重要な交換品目で，実際に共同体の内部の生産物の交換価値にとって，自然発生的な現象形態となる共同体の外部からの品目に付着する

か，あるいは家畜のように，共同体の内部の使用対象で，譲渡可能な財産の主要なものである品目に付着するかのどちらかである」（Marx［1890］邦訳166ページ）。この記述が示すように，マルクスは共同体外部との交換取引あるいは共同体内部の交換取引によって貨幣は生成すると主張する。この点では，上に引いた『経済学批判序説』や『経済学批判要綱』とは基本的に変わらない。

ただし，そうした交換取引においてどのような商品が使われるかはまったくの偶然であるとマルクスはいう。「遊牧民が最初に貨幣形態を発展させる。遊牧民のすべての財産は移動可能な形態をとっており，直接に譲渡可能な形態にあるからである。そして遊牧民はその生活様式のために，絶えず外部の共同体と接触し，生産物を交換するように促されるからである。人間は奴隷の形で，人間そのものを原初的な貨幣の素材にしてきたが，土地を貨幣の素材にしたことはなかった」（*Ibid.*）。マルクスによれば，どのような商品が最初に一般的な価値等価物（貨幣）として選択されるかは偶然の事柄（a matter of accident）であると考えられたのである（Karimzadi［2013］p. 168）。

加えてマルクスは次のようにも述べている。「交換価値は，まず量的な関係として示される。この量的な関係とは，ある種の使用価値が別の種類の使用価値とどのような比率で交換されるかを示すものであり，この関係は時と所に応じて絶えず異なる。このため，交換価値は偶然的なもの，まったく相対的なもののように見える。そこで商品には内在的で固有の交換価値があるという表現は，形容矛盾に聞こえるのである」（Marx［1890］邦訳29ページ）。すなわち，彼は「貨幣という結晶は，交換プロセスから生まれた必然的な産物」（*Ibid.,* 邦訳162ページ）であると述べる一方，貨幣として何が選択されるかは偶然の事柄であると指摘し，「商品の量的な交換比率は，最初はまったく偶然によって決められる」（*Ibid.,* 邦訳164ページ）というのである。

こうしたマルクスの見解をたどっていくと，貨幣の生成に関する彼の考え方はあまり体系的でも独創的でもないように思われる。そのことは先にも触れたように，彼が貨幣の出現を説明するに際して遊牧民と結びつけ，共同体の境界に住んでいる遊牧民が，その余剰生産物を他の共同体の遊牧民の余剰生産物との交換を通じて一般的交換手段としての貨幣が生じるという考え方に典型的に見出される。つまり，マルクスはあくまでも何らかの偶然的な出来事に貨幣生成の根拠を求めようとするのである。しかしながら，カリムサディの言葉を借りるならば，「この貨幣の起源をマルクスはある不明確な（hazy）歴史的証拠に依存するのである」（Karimzadi［2013］p. 190，傍点は引用者）。もしそうなら，十分な歴史的検証に耐え得ない，あるいは時間や空間に関してきわめて限定的な証拠によって貨幣生成の端緒を一般的な形で説明することにほかならず，大きな問題があると言わねばならない。マルクスは価値形態論において，金という単一の商品への収斂のプロセスを詳しく論じているが，そこで展開される論理と，上に述べた曖昧な歴史的記述との間には大きなギャップが存在する。

以下ではそのことを明らかにするために，マルクスの価値形態論に基づいて，彼の論理的な貨幣生成論を検討することにしたい。マルクスの価値形態論はあまりにもよく知られているものの，論者によって解釈が異なり，必ずしも彼の意図どおりには正確に把握されていないように思われる[10)]。

10）周知のように，マルクスの価値形態論は労働価値説をベースにしているが，これを労働価値説とは独立に，価値形態論それ自体として理解しても何ら問題ではない。この点は，岡田［1998］19ページを参照されたい。なお岡田［1998］第2章第2節には，「メンガーの貨幣形成論」が検討されている。その考え方は，次号で考察

2　価値形態論と貨幣の生成

マルクスの価値形態論は，彼の貨幣起源論の中枢を占めるものであり，さまざまな価値形態を経由した貨幣生成の理論が展開されている。マルクスによれば，商品には使用価値（自然的形態）と価値（交換価値）があり，「商品は，鉄，リネン，小麦のように，使用価値の形態で，すなわち商品体として世界に登場する。これは商品の生まれながらの自然の形態である。しかし，それらが商品であるのは，使用される対象でありながら，同時に価値の担い手でもあるという二重の性格を備えているからである。それゆえ，商品は自然の形態であると同時に，価値の形態でもあるという二重の形態を備えている限りにおいて，商品なのである」（Marx［1890］邦訳 59 ページ）。彼はこの商品の二重の形態に着目し，ある特定の商品が貨幣に転化するプロセスを追求する。次の記述には，貨幣発生のプロセスを明らかにしようとするマルクスの並々ならぬ決意が込められている。「商品というものは，自然形態においては多彩な使用形態を備えているが，これとは明確に対照的な共通の価値形態として，貨幣形態を備えていることを知らない人はいない。しかしここで私たちは，ブルジョア経済学がこれまで一度も試みたことのないことを実行しなければならない。この貨幣形態の発生プロセスを追跡すること，商品の価値関係のうちに含まれる価値表現を，その最も単純で地味なあり方から出発して，光輝く貨幣形態にまで発展していくプロセスを跡づけることを試みるのである。これは成功すれば，貨幣の謎は解けるのである」（*Ibid* 邦訳 60–61 ページ，傍点は引用者）。よほどの自信があったのか，マルクスはこのように高らかに宣言する。彼は，「単純な価値形態」，「全体的な価値形態」，「一般的な価値形態」，「貨幣形態」，の 4 つの段階を経て貨幣の起源を論証する。

まず，マルクスに即して「単純な価値形態」について説明しよう。例えば，20 ヤードのリネンの所有者が 1 着の上着の所有者に対して交換を要請している場合を考える。この関係を等式で表すと，次のように表現できる。

リネン 20 ヤード＝上着 1 着

この場合，第 1 の商品であるリネンは能動的な役割をはたし，第 2 の商品である上着は受動的な役割を担い，第 1 の商品（リネン）の価値は相対的な価値として表現される。一方，受動的に選ばれた第 2 の商品（上着）は等価形態を表し，20 ヤードのリネンへの直接的な交換の可能性を与えられる。マルクスはこの受動的役割をはたす上着に大きな役割を見出し，「上着がリネンと直接に交換できるからこそ，リネンは実際にみずから価値のある存在であることを実現する。このようにある商品の等価形態は，その商品が他の商品と直接に交換できることを示す形態なのである」（*Ibid.*，邦訳 76–77 ページ）という。すなわち，実際の交換取引は上着所有者がリネン所有者の要請を受け入れる場合にのみ実現するのである。マルクスは以上のような 2 つの商品の交換を，「単純で個別的な価値形態」（あるいは「偶然的な価値形態」）と呼び，リネンを相対的価値形態にある商品，上着を等価形態にある商品（等価物）であるとする[11)]。

する「メンガーの貨幣起源論」とはかなり異なっている。いずれが正鵠を得ているかは，読者の判断にゆだねたい。

11）マルクスがいうように，以下の等式においては，第 1 の商品であるリネンは能動的な役割をはたし，第 2 の

このような「単純な価値形態」は，非常に特殊で「偶然的な価値形態」であることはいうまでもない。ある商品と別の商品のそれぞれの所有者，例えばリネンと上着のそれぞれの所有者の間に「欲求の二重の一致」が成立するのはまったく偶然の出来事にほかならないからである。リネンの所有者は，上着の所有者に対して交換を要請するのみならず，茶，コーヒー，小麦，金など他の多くの商品の所有者にも交換要請し，上着以外の他の等価物との間にも一定の価値関係が成立しているケースが普通である。こうした価値関係は，次のように表示される。

リネン20ヤード＝上着1着
リネン10ヤード＝茶5ポンド
リネン20ヤード＝コーヒー40ポンド
リネン40ヤード＝小麦2クオーター
リネン10ヤード＝金1オンス
……
……

マルクスは以上の価値形態を，「全体的な価値形態」あるいは「展開された価値形態」と呼んでいる。だが，マルクスは「全体的な価値形態」あるいは「展開された価値形態」には3つの欠陥があるという。彼の記述をそのまま借用しよう。「第1に，この商品の相対的な価値表現は不完全である。これを表現する系列は完結することがないからである。一つの価値等式を別の価値等式と結ぶ連鎖は，新たな種類の商品が登場するたびに，いくらでも引き延ばされる。……第2に，この連鎖はばらばらの異なる種類の価値表現の多彩なモザイクのようなものにすぎない。第3に，これは常に起こることだが，どの商品の相対的な価値もこの展開された形態で表現されるようになると，すべての商品の相対的な価値形態が，他のどの商品の相対的な価値形態とも異なる価値表現の系列となり，これは終わりがなくなる」（*Ibid.*, 邦訳94–95ページ）。つまり，上着をはじめとする受動的な役割を果たす等価物には限界がなくなり，あらゆる商品の価値を統一的に一つの商品によって表現することは不可能になるというのである。

以上のような「全体的な価値形態」の欠陥は，マルクスのいう「一般的な価値形態」において克服される。「一般的な価値形態」は，ある特定の商品，例えば茶が他の商品の共通の等価物として選ばれるようになったとすると，以下のように表示される。

リネン20ヤード＝茶10ポンド
上着1着＝茶10ポンド

商品である上着は受動的な役割をはたしている。こうした関係を表現するのに，数学的な等号（＝）を用いることに違和感を覚える識者は少なくない。そのため，例えば山口［1985］17–27ページ，Lapavitsas［2005］pp. 103–108では等式の代わりに矢印（→）で能動的役割をはたす商品と受動的役割をはたす商品の関係が表示されている。ここでは，降旗節雄が「この等号が一般の数学における等号とは性格が違うということさえはっきりしていれば，これを使っていっこう差し支えないであろう。というよりむしろ，リネンの価値が上着に等しいということを表現するためには，やはり等号を使う以外にないのである」（降旗［1976］105ページ，注1）という立場を支持したいと考える。

コーヒー 10 ポンド＝茶 2.5 ポンド
小麦 0.5 クオーター＝茶 5 ポンド
金 2 オンス＝茶 10 ポンド
……
……

この等式の体系は，「全体的な価値形態」を示す等式体系から容易に導かれる。ここでは茶以外のすべての商品（上着，コーヒー，小麦，金など）は，茶という共通の等価物によって表現されている。茶は使用価値をもつ商品であるが，茶を共通の等価物とする商品の範囲が拡大するにつれて，他の多くの商品との直接的な交換の可能性も拡大し，他の商品の所有者が茶との交換を要請するようになる。そして遂には，茶が他のすべての商品との直接的な交換可能性を独占し，すべての商品の価値を統一的に一つの商品によって表現するに至って一般的等価物としての地位を確保する。この一般的等価物こそが貨幣にほかならない（降旗［1976］103–107 ページ，伊藤・ラパヴィツァス［2002］35–38 ページ）。

上述の茶を共通の等価物とする価値形態の導出から明らかなように，論理的・形式的には，茶以外の他のすべての商品も一般的等価物（貨幣）となりうる。すなわち，どの商品も他のあらゆる商品を購入することができるというように仕向けることは容易である。けれども，物理的特性や歴史的経緯から見て，貴金属，なかでも金が貨幣としての適性を備えていると考えられる。このことは，次のようなラパヴィツァスの記述に的確に表されている。「いくつかの商品が物理的特性（耐久性，均質性，分割可能性，運搬可能性など）から見てこの目的に適合している。この目的に最も適合する商品は貴金属である。それらは耐久性，均質性，分割可能性および運搬可能性から見て例外的に優れているからである。また金と銀は歴史的には高価な装身具や人目を引く富の顕示のために用いられてきたので，商品の所有者たちは貴金属は価値を代表するという考え方に慣れてきた。その結果として，とりわけ金が，一つはその物理的な特性から，他の一つはその使用に癒着する社会的慣行という理由から，購買力を独占するのである（価値を表す唯一の独立の代表となる）。こうして金の使用は社会的規範そのものとなり，貨幣の地位を達成する」（Lapavitsas［2005］p. 108）。マルクス自身は，次のように述べている。「この特別な種類の商品は，その自然の形態が社会的な等価形態と癒着することによって，貨幣商品となったのであり，それは貨幣として機能するようになる。商品世界の内部で，一般的な等価物の役割をはたすことが，この商品の特別な社会的な機能となったのであり，その機能を社会的に独占することになる」（Marx［1890］邦訳 106 ページ）。

これまで商品の価値形態を，「単純な価値形態」（第 1 形態），「全体的な価値形態」（第 2 形態），「一般的な価値形態」（第 3 形態）と見てきたが，さまざまな商品のうち優先的な地位を歴史的に獲得した金を共通の等価物として表現する価値形態は，次のような等式体系で示される。これが，マルクスのいう最後の価値形態としての「貨幣形態」（第 4 形態）である。

リネン 1 ヤード＝金 0.1 オンス
上着 1 着＝金 2 オンス
コーヒー 1 ポンド＝金 0.05 オンス
小麦 1 クオーター＝金 2 オンス

茶1ポンド＝金0.2オンス

……

……

上に示されるように，金は貨幣としてあらゆる商品の価値を表現すると同時に，一般的等価物として社会的に受容され，金の所有によってその価値に応じたあらゆる商品を購入することができる。マルクスは「単純な貨幣形態」からはじめて，こうしたあらゆる商品との直接的な交換可能性を独占する「貨幣形態」に至るまで，具体的ないくつかの商品を例示しながら体系的に分析する。「貨幣という結晶は，交換プロセスから生まれた必然的な産物であり，さまざまに異なる種類の労働の生産物は，貨幣において互いに実際に同等なものとされ，実際に商品へと変わるのである。交換が歴史的に拡大し，深化すると，商品の本性のうちにまどろんでいた使用価値と価値の対立が発展する。そして人々の間に，この対立を取引においてはっきりと見えるものにしたいという欲求が生まれ，商品価値がある自立した形態をとるまで進む。そしてある商品が商品であると同時に貨幣であるという二重の形態をとって，この自立した形態が最終的に実現されるまで，この欲求は休まることがない」（*Ibid.*, 邦訳162ページ）。こうした記述に沿う形で，マルクスは第1形態から第4形態までの価値形態の変化を説き明かすのである。

以上の価値形態の変化は，交換が歴史的に拡大し，深化するとともに，ある特定の商品（金）が貨幣としての位置を獲得するまでのプロセスを描写している。その場合，マルクスが例示する交換の初期における遊牧民や奴隷制の社会が，どの国・地域にも該当する普遍的な社会でないことは当然である。そして先に触れたように，マルクスは交換の初期段階における物々交換に貨幣生成の根拠を求め，奴隷，牛，金属などが最初の貨幣として出現したと指摘する。しかし，第Ⅵ節（次号）で触れるように，そうした物々交換経済がはたして現実に存在したのか，歴史的検証に耐えうるのかという点については疑問なしとはしない。ただし，最初の価値形態は国・地域，あるいは歴史的な発展段階などによって異なるものの，交換取引が拡大・深化するにつれて，マルクスの描写する独占的な購買力を確保する金への収斂のプロセスが論理的に妥当することは否定できないように思われる[12)]。

3　商品流通と「命懸けの跳躍」

『資本論』第1巻第1篇は「商品と貨幣」というタイトルで始まり，第1章（商品），第2章（交換過程），第3章（貨幣または商品の流通）の3つの章から構成されている。当然のことながら，これらの章は密接に関連している。まず第1章では，使用価値と交換価値の関係，商品に体化された労働の二重性，さまざまな価値形態を経由した貨幣生成の過程，商品のフェティシズム（物神性）の理論などが体系的に論じられる。第2章では第1章を踏まえ，主として貨幣の起源を歴史的観点

12）マルクスは，貨幣（金および銀）のみならず，信用貨幣についても考慮していることは次の記述からも明らかである。「信用貨幣は，貨幣の支払い手段としての機能から直接に発生する。販売された商品の債務証書そのものが，債務請求権の移転のために再び流通するからである。他方で信用制度が拡大すると，支払い手段としての貨幣の機能も拡大する。このように支払い手段としての貨幣はさまざまな存在形態をとるようになり，こうした形態の貨幣は大口の商業取引の領域を住みかとする独自の存在形態をとるようになるが，金と銀の鋳貨は，主に小口の取引の領域に追い返すのである」（Marx［1890］邦訳286ページ）。

から明らかにする。第3章では貨幣の機能としての価値の尺度，流通手段について詳細に検討し，次いで貨幣の退蔵の問題，商品流通における支払い手段としての貨幣固有の特徴，世界貨幣としての貨幣（金）の普遍的な機能について記述される。以上の構成から分かるように，『資本論』第1巻第1篇は，多岐にわたって商品と貨幣の不即不離の関係を考察しているが，マルクスの貨幣起源説の核心に迫るためには，第2章および第3章における貨幣の機能に関する彼独自の考え方を明らかにする必要がある。

マルクスは第2章の冒頭を次のようなユニークな言い回しで始めている，「商品は自分で歩いて市場に出かけて，みずから交換し合うことはできない。だから私たちは，商品の保護者である商品所持者を探し出す必要がある。商品は物であるから，人間に逆らうことはできない。商品が言うことを聞かなければ，人間は暴力をふるうことができる。言い換えると，商品を［市場に］持っていくことができる」（*Ibid* 邦訳159ページ）。第2章でも，マルクスは古典派の伝統に従って貨幣を直接的交換の諸困難を克服する手段として位置づける。直接的交換の諸困難は，すでにマルクス［1859］（邦訳71–73ページ）で論じているように，商品の性質に内在する使用価値と交換価値との対立に起因する。すなわち，①使用価値は特殊であるが，交換価値は一般的である。交換価値としては，各商品は質的に同一かつ分割可能で均質であるが，使用価値としては，各商品は質的に異なり，分割可能性は不完全で，異質である。②各商品が使用価値であると同時に交換価値であると，直接交換は不可避的に行き詰まる。けれども，ある特定の商品が貨幣としてすべての商品の価値を表す一般的等価物として機能すれば，その行き詰まりは回避される（伊藤・ラパヴィツァス［2002］36ページ）。

一方，『資本論』第1篇第3章，とりわけその中心を占める第3節（流通手段）では，貨幣の機能を軸にして商品と貨幣の分かちがたい関係を考察し，貨幣の起源についてのユニークな見方を提示する。彼は貨幣（金）の機能として，「金の第1の機能は，商品世界に価値表現の材料を与えることであり，［価値の尺度として］同じ分母の大きさとなって，複数の商品の質的に同等で，量的に比較可能な大きさとして表現することにある。このように金は，一般的な尺度として機能するのであり，この機能をはたすことによってのみ，金という特別な等価形態商品は，まず貨幣となる」（Marx［1890］邦訳183ページ）という。

マルクスは価値尺度と並ぶ貨幣の機能として，交換過程における「流通手段」としての機能も重視する。彼は最初に商品の交換過程を次のように説明する。「商品の交換過程は互いに対立し，補い合う2つの変身の形で実現される。つまり，ある商品が貨幣に変化し，次に貨幣が別の商品に変化するのである。この商品の変身の2つの側面は，商品所持者の取引である販売という側面と，購入という側面の2つの側面であり，同時にこの2つの行為が統一されて，購入するために販売することである（*Ibid.,* 邦訳210–211ページ）。

この交換過程は，周知の形態の変化として表される。

商品（W）－貨幣（G）－商品（W）

マルクスはこの形態変化について，$W-W$ は商品と商品の交換であるが，この商品と商品の交換過程を $W-G$ と $G-W$ に分解し，「商品の最初の変身としての販売」（Marx［1890］邦訳212ページ）である $W-G$ について，「これは商品の価値が商品の身体から金の身体へと飛び移る行為であり，……商品の命懸けの跳躍である。この跳躍に失敗したならば，商品は無傷のままであろうが，おそらく商品所持者には痛いことだろう。社会的な分業によって，彼の欲望はますます多彩なもの

となるだろうが，彼の労働はますます一面的なものとなる。そのために彼の労働の生産物は，交換価値としてしか彼の役に立たない」（*Ibid.*, 傍点は引用者）というのである。

次に，「商品の第2の変身または最終的な変身，すなわち購入」（*Ibid.*, 邦訳220ページ）である $G-W$ について，「貨幣は他のすべての商品の脱皮した姿であり，すべての商品の全面的な譲渡の産物であるから，絶対的に譲渡することのできる商品である」（*Ibid.* 邦訳同ページ）と述べ，「価格とは，さまざまな商品が貨幣に自らを売り込もうとする愛のまなざしであり，この価格は貨幣の変化能力の限界，すなわち貨幣そのものの量を示すものである。商品が貨幣に変わるときには，商品の姿は消えてしまう。だからその貨幣がどのようにして今の所有者の手に渡ったのか，何が貨幣に変わったのかは，貨幣を見ても分からない」（*Ibid.*, 傍点は引用者）と続けている。

マルクスはこのように説明したうえで，$W-G-W$ の交換過程の最初の局面，つまり $W-G$ について，「商品の所有者は，販売を実行する者としては売り手であり，購入を実行する者としては買い手である」（*Ibid.*, 邦訳222ページ）という自明の事柄に触れたのち，この自明の事柄の背後に潜む重要な真実をえぐり出す。「販売と購入は，対極的な立場にある2人の人，すなわち商品の所有者と貨幣の所有者との相互的な行為としては，同一の行為である。しかし同一の人物にとっては，これは2つの対極的に対立した行為となる。だから販売と購入が同一であるということは，流通という錬金術の坩堝（るつぼ）のなかに投げ込まれた商品が，貨幣として姿を現さないならば，すなわち商品の所有者が販売し，貨幣の所有者が購入するのでなければ，この商品は無駄になることを意味する」（*Ibid.*, 邦訳226–227ページ）と喝破する。

この一文に，購入―販売という日常繰り返される単純な現象へのマルクスの深い洞察力と独創的な見解を窺い知ることができる。すなわち，商品の購入（$G-W$）に関するイニシアティブを握っているのは，あくまでも貨幣所有者の買い手である。貨幣所有者が商品を購入することを決定してはじめて，商品の売り手は販売することができる。一方，商品の販売（$W-G$）に関するイニシアティブを商品所有者が握ることは，基本的にはあり得ない。商品所有者にとって，商品の販売の成否は商品所有者とは独立な貨幣所有者の意志決定に左右されるからである。かくて，$W-G-W$ における $W-G$ の過程と $G-W$ の過程の間には大きな非対称性が存在する。マルクスは，こうした商品の交換過程における非対称性の存在を剔出したのである（山口［1985］33–34ページ，石倉［2012］188ページ）。商品所有者と貨幣所有者の間の意志決定の独立性と，商品の交換過程における非対称性の存在を明らかにしたところに，古典派や新古典派あるいはケインズ経済学といった主流派経済学には見られない大きな特色があると言えよう。

マルクスは，「商品は貨幣を恋こがれるが，『真実の恋はなかなかうまくはいかない』と言わざるをえない」（Marx［1890］邦訳215ページ）との巧みな比喩を用いて，商品と貨幣との緊張する対立関係を論じている[13)]。この有名な表現も，商品の所有者はいつでも所持する商品の販売（$W-G$）を切望しているものの，それを実現することは容易ではないという現実に対応している。マルクスは，「販売は同時に購入であり，購入は同時に販売であるという理由で，商品の流通が販売と購入を必然的に均衡させるという理論があるが，これほど愚かしい理論はない」（*Ibid.*, 邦訳226ページ）と述べ，いわゆるセー法則の欺瞞性を批判する。マルクスはいう。「買い手はいまでは商品を手に

13）シェークスピア『真夏の夜の夢』第1幕，第1場122ページ（Shakespeare［1623］邦訳18ページ）。ただし，『真夏の夜の夢の出版年にはいくつかの異説がある。これについては，訳書169–176ページを参照されたい。

しており，売り手は貨幣を手にいれている。貨幣とは，流通において使われうる形態を維持している商品であり，やがては遅かれ早かれ，ふたたび市場に現れることになるだろう。いかなる売り手も，買ってくれる相手がいなければ売ることができない。しかし誰も，売ったからといってすぐに何かを買わなければならないわけではない。流通は生産物の交換にそなわる時間的，空間的，個人的な制約を突破する。それは生産物の交換では，自分の労働の生産物を譲渡することが，他人の労働の生産物を取得することと直接に同一であるが，これに対して商品の流通では，この同一性が販売と購入の対立のうちに分割されるからである」（*Ibid.*, 邦訳 227–228 ページ）。

このように，販売と購入とは対立した行為であり，対極的な立場にある商品の所有者と貨幣の所有者の間に深刻な非対称性が存在すると，恐慌が発生する可能性も排除できないとマルクスは主張するのである（Marx［1890］邦訳 228 ページ）。この流通過程における分析は，マルクスとしては珍しいほど平明ではあるが，商品の売買という日常的に繰り返される平凡な人々の営為のなかに，商品の売り手と買い手の対立があり，恐慌に象徴される経済活動の深淵が潜んでいるという彼の明確なメッセージを見逃すことはできない。

ところで，マルクスが貨幣としての金に対して絶対的な信頼をおいている点についても言及しておきたい。彼は貨幣の機能との関連で次のように述べている。「貨幣は，特定の機能をはたす際には，たんなる記号で代用することができるために，貨幣は記号にすぎないという別の誤謬が生まれた。他方ではこの誤謬は，ある物品の貨幣形態は，その物品にとっては外面的なたんなる現象形態にすぎず，その背後には人間的な関連が潜んでいることを暗黙のうちに予感するものであった。この意味では，すべての商品もまた一つの記号であろう。商品は価値としては，商品を生産するために投入された人間労働を物の形態で覆った外皮のようなものにほかならないからである」（*Ibid.*, 邦訳 169 ページ）。ここで，マルクスは「貨幣は記号にすぎないという別の誤謬」を代表するものの一つとしてモンテスキューの『法の精神』の一節を引いている（*Ibid.*, 邦訳 176 ページ）。『法の精神』の「貨幣の本性について」という章（第 22 篇第 2 章）の冒頭で，モンテスキューは「貨幣はあらゆる商品の価値を表示する標識である。この標識が永続的で，使用によって磨滅することがほとんどなく，破壊されることなく多数に分割できるように，なんらかの金属が選ばれる。金属は共通の尺度とするのにきわめてふさわしいものである。なぜなら，容易にこれを同じ品位のものに分割できるからである。各国はそれに自国の刻印をつける。形が品位と重量とを保証し，ただ見るだけでこの両者を知るようにするためである」（Montesquieu［1748］邦訳 216 ページ）。

加えて，モンテスキューは次のように指摘する。「現実の貨幣と観念的貨幣とがある。文明国民はほとんどすべて観念的貨幣を使用するが，それは彼らが現実的貨幣を観念的貨幣に転換するからにほかならない。彼らの現実的貨幣は最初は一定の重量と一定の品位をもった何らかの金属である。しかし，ほどなく悪意あるいは欲望のために各貨幣の金属の一部が取り去られ，名目がそのまま残される」（*Ibid.*, 邦訳 218 ページ）。モンテスキューは，今日，貨幣の「象徴化」あるいは「無体化」と呼ばれる現象に着目し，「現実的貨幣」（金属貨幣）から「観念的貨幣」（名目貨幣）への転換を必然的な歴史的現実として把握したのである。貨幣の起源を「現実的貨幣」と「観念的貨幣」に求める考え方は，通常，それぞれ「商品貨幣説」と「名目貨幣説」，あるいは「金属主義」と「反金属主義」と呼んでいる[14)]。

14）高田保馬は「商品貨幣説」と「名目貨幣説」（ないし「金属説」と「反金属説」）について詳細に説明したあと，

一方，マルクスは「貨幣は記号である」という見解を批判する。「特定の生産様式を基礎とした物品の社会的性格をたんなる記号とみなすことは，あるいは労働の社会的本質が受け取る物としての性格をたんなる記号とみなすことは，それは同時にこうした性格を人間の普遍的な合意によって正当化される虚構とみなすことである」（Marx［1890］邦訳169ページ）。このマルクスの反論は難解であり，十分な説得力をもつとは思われないが，それよりも問題なのは，モンテスキューに代表される「貨幣はあらゆる商品の価値を表示する標識である」という考え方が誤謬であると断定しうるかどうかという点である。貨幣の歴史は無体化の歴史，つまり貨幣がその素材価値を失っていく歴史であることを考えれば，マルクスの批判が妥当するのか否か，あるいは名目主義に立つモンテスキューと，金属主義を信奉し，“Money is not a symbol”（Marx［1970］p. 49, Marx〔1952〕p. 41）と主張するマルクスのどちらに軍配が上がるかは明白であるように思われる。

この点は，マルクスのいう世界貨幣についてもあてはまる。彼は次のように主張する。「一国の国内の流通領域から外に出ると，貨幣は国内の流通で発生する価格の度量基準，鋳貨，補助貨，価値記号といった局地的な形態を脱ぎ捨てて，ふたたび貴金属の本来の地金の形態に戻ることになる。世界貿易の領域では，商品はその価値を普遍的に展開する。そこで貨幣も自立した価値の姿をとって，世界貨幣として商品に対応する」（Marx［1890］邦訳288–289ページ）。だが，この主張が妥当しなくなってすでに久しい。さすがのマルクスさえ貨幣の将来を見渡せなかったのである[15)]。

名目貨幣説（高田のいう指図権説）について，「素材価値は名目価値に及ばない，または素材価値のほとんど伴わない貨幣はあまりに多く認められる。こうした事情から考えると，貨幣とは貨幣としての作用，すなわち貨幣の機能の中に求められなければならない。そして，このような機能を営むものこそは貨幣なりと認められなければならない」（高田［1931］31ページ）と述べ，名目貨幣説（指図権説）に軍配を上げている。現実を直視する点では，金属説に固執するマルクスと違って，非常に柔軟である。

なお，シュンペーターは「貨幣商品説」と「名目貨幣説」の代わりに，クナップの『貨幣国定説』にならって，「金属学説」（Metallism）と「表券学悦」（Caltalism）あるいは「反金属学説」（Antimetallism）という表現を用いて，それぞれについて詳しい説明を行っている。Schumpeter［1954］Part Ⅱ, Chap. 1, 5（b）, Chap. 6, 2（a），（b）（邦訳『経済分析の歴史』（上）107–109および520–531ページ）を参照のこと。

15）岩井克人は，『資本論』の価値形態論が循環論法であると主張する。彼によれば，「『資本論』の読み手の多くは，ここに循環論法のにおいをかぎつける。労働価値論を前提して商品世界の貨幣形態をみちびきだし，商品世界の貨幣形態をとおして労働価値論を実証するという循環論法である」（岩井［1993］42ページ）。同様の議論は，同書52–58ページおよび105ページでも繰り返される。そして「貨幣とは商品であるという貨幣商品説も，貨幣とは法律の創造物であるという貨幣法制説も，そのあいだで闘わされてきた悠久千年の争いにもかかわらず，貨幣の背後に貨幣を貨幣たらしめる『何か』を想定しているという点ではまさに同罪なのである」（同222ページ）と言い，「貨幣についてまともに論じたければ，『貨幣とは何か？』という問いにまともに答えてはいけない。もしどうしてもそれに答える必要があるならば，『貨幣とは貨幣として使われるものである』という木で鼻をくくったような答えが，けっしてたんなるこけ脅しでも同義反復でもないということを示してみるのが本書のひとつの目的なのである」（同ページ）と述べている。

「『貨幣とは何か？』という問いにまともに答えてはいけない」とまで言われると，いささか抵抗を感じざるを得ない。『貨幣論』というタイトルの書物に，貨幣という不思議なものについて意を尽して説明することは当然であると考えるからである。それはさておき，筆者は，マルクス価値形態論を循環論法と切って捨てる岩井の主張は的外れであるように思われる。というのは，価値形態論は本来，相対的価値形態にある商品（能動的な役割をはたす商品）と等価形態にある商品（受動的な役割をはたす商品）との反転不可能な一方的関係を表したものであり，両者の間の双方向の関係を示したものではないからである。この点については，上の注11も

参考文献

（以下に引用した翻訳文献については，漢字や平仮名などを含め，必ずしも翻訳には従っていない場合がある）

Buchanan, J. M. [1982] “The Domain of Subjective Economics: Between Predictive Science and Moral Philosophy” in Israel M. Kirzner (ed.), *Method, Process, and Austrian Economics: Essays in Honor of Ludwig von Mises*, Lexington, Massachusetts, Lexington Books.

Campagnolo, Gilles [2002] “The Carl Menger Library in Japan: A Study of the Sources of an Economic Thought,”（山崎耕一訳「メンガー文庫；ある経済思想の原資料」），『社会科学センター年報』（一橋大学）.

Dalton, George [1982] “Barter,” *Journal of Economic Issues*, vol. 16, no. 1, pp. 181–190.

Davies, Glyn [1994] *A History of Money,: From Ancient Times to the Present Day,* Cardiff, University of Wales Press.

Frankel, S. H. [1977] *Money: Two Philosophies, the Conflict of Trust and Authority,* Oxford, Basil Blackwell.

Grassl, W. and B. Smith (eds.) [1986] *Austrian economics: Historical and Philosophical Background,* London, Croom Helm Ltd.

Harris, Joseph [1757–58] *An Essay upon Money an coins*, Part1, East Ardsley, S. R. Publishers Limited.（アダム・スミスの会監修，初期イギリス経済学古典選集 13，小林　昇訳『貨幣・鋳貨論』東京大学出版会，1975 年）。

Hayek, F. A. [1973] “The Place of Menger’s *Grundsätze* in the History Economic Thought” in Hicks, J. R. and W. Weber (eds.). *Carl Menger and the Austrian School of Economics*, Oxford, Clarendon Press, pp. 1–14.

Hicks, J. R. [1967] *Critical Essays in Monetary Theory*, Oxford:, Clarendon Press（江沢太一・鬼木　甫訳『貨幣理論』東洋経済新報社，1972 年）。

Hicks, J. R. [1969] *A Theory of Economic History,* Oxford: Clarendon Press（新保博・渡辺文雄訳『経済史の理論』講談社学術文庫，1995 年）.

Hicks, J. R. and W. Weber (ed.) [1973], *Carl Menger and the Austrian School of Economics*, Oxford, Clarendon Press.

Hutchison T. W. [1981], *The Politics and Philosophy of Economics : Marxians, Keynesians and Austrians*, Oxford, Basil Blackwell.

Jevons, W. Stanley [1875] *Money and the Mechanism of Exchange*, London, Kegal Paul, Trench, Trubner & Co.

Jones, R. A. [1976] “The Origin and Development of Media of Exchange,” *Journal of Political Economy*, vol. 84, no. 4, pp. 757–775.

Karimzadi, Shahzavar [2013] *Money and its Origins*, London and New York, Routledge.

Kauder, Emile [1965] *A History of Marginal Utility Theory*, Princeton, Princeton University Press.（斧田好男訳『限界効用理論の歴史』嵯峨野書院，1979 年）。

Kirzner, I. M. (ed.) [1982] *Method, Process, and Austrian Economics : Essays in Honor of Ludwig von Mises*, Lexington, Massachusetts, Lexington D. C. Heath and Company Books.

Kiyotaki, Nobuhiro and Randall Wright [1989] “On Money as a Medium of Exchange,” *Journal of Political Economy*, Vol. 97, No. 4, pp. 927–954.

Kiyotaki, Nobuhiro and Randall Wright [1991] “A Contribution to the Pure Theory of Money”, *Journal of Economic Theory*, Vol. 53, No. 2, pp. 215–235.

Kiyotaki, Nobuhiro and Randall Wright [1993] “A Search Theoretic Approach to the Pure Theory of Money,” *American Economic Review*, Vol. 83, No. 1. pp. 63–77.

Knapp, G. F. [1922] *Staatliche Theorie des Geldes*, 3 Aufl.（宮田喜代蔵訳『貨幣国定学説』岩波書店，1922 年）。

Knapp, G. F. [1924] *The State Theory of Money*, abridged and trans. by Lucas, H. M. and J. Bonar, London, Macmillan.

Lapavitsas, Costas [2005] “The Universal Equivalent as Monopolist of the Ability to Buy,” in Moseley, F. (ed.),

参照されたい。

Marx' Theory of Money; Modern Appraisals, Palgrave.

Law, John [1705] *Money and Trade Considered with a Proposal for Supplying the Nations with Money,* Reprints of Economic Classics, New York Augustus M. Kelly, Publishers, 1966.

Law, John. [1994] *John Law's 'Essay on a Land Bank'*, edited by A. E. Murphy, Dublin, Aeron Publishing.

Locke, John [1691]*Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money*, London, Awnsham & John Churchll, Reprinted 1968, New York, Augustus M. Kelley Publishers（田中正司・竹本洋訳『利子・貨幣論』:『利子の引下げおよび貨幣の価値の引上げの諸結果に関する若干の考察』東京大学出版会，1978年）。

Locke, John [1695] *Further Considerations Concerning Raising the Value Of Money*, London, Awnsham & John Churchll, Reprinted 1968, New York, Augustus M. Kelley Publishers（田中正司・竹本洋訳『利子・貨幣論』:『貨幣の価値の引上げに関するする再考察』東京大学出版会，1978年）。

Marx, Karl [1857–1858] *Grundrisse, der Kritik der Politischen Ökonomi* (Rohentwurf), Anhang 1850–1859, Dietz Verlag, Berlin, 1953.（高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』（草案），第1分冊，大月書店，1959年）。

Marx, Karl [1859] *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, Erstes Heft, Volksausgabe, besorgt von Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau.（武田隆夫他訳『経済学批判』岩波書店，1956年）。

Marx, Karl [1890] *Das Capital*, Erster Band, Diez Verlag（中山元訳『資本論：経済学批判』第1巻1，日経BP社，2011年）。

Marx, Karl [1952] *Das Capital*, Erster Band, English translation by Samuel Moore and Edward Aveling of the 3th German edition [1883] and additional translation by Marie Sachey and Herbert Lamm from the 4th edition, Capital, vol. 1. (The University of Chicago: Encyclopaedia Britannica, 1952).

Marx, Karl [1970] *A Contribution to the Critique of Political Economy*, New York, International Publishers.

Menger, Carl [1871] *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre Erster, allgemeiner Theil,* Verlag Wirtschaft und Finanzen, Düsseldorf（安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本経済評論社，1999年）。

Menger, Carl [1883] *Problems of Economics and Sociology* (*Untersuchungen Über die Methode der Socialwissenschaften und der politischen Oekonomie insbesondere,* Leipzig), translated by Francis J. Nock, Urbana, University of Illinois Press.（福井孝治・吉田昇三訳，吉田昇三改訳『経済学の方法』日本経済評論社，1986年）。

Menger, Karl [1892] "On the Origin of Money," *The Economic Journal,* Vol. 2, No.6 (June), pp. 239–255.

Menger, Karl [1973] "Austrian Marginalism and Mathematical Economics" in *Carl Menger and the Austrian School of Economics* edited by Hicks J. R. and W. Weber, Oxford, Clarendon Press.

Menger, Carl [1976] *Principles of Economics*, first, General Part, translated and edited by James Dingwall and Bert F. Hoselitze; The Institute for Human Studies (reprinted by the Ludwig von Mises Institute, 2007).

Mises, L. V. [1953] *The Theory of Money and Credit*, translated by Batson H. E. , Yale University Press.

Montesquieu [1748,1951] *De l'Espril des Lois*, Bibliothè-que de la Pléiade (*Euvres completes de Montesquieu*, tom II, Texte presénté et annoté par Roger Caillois, Paris, Gallimard, 1951).（野田良之他訳『モンテスキュー　法の精神』（中巻）岩波書店，1989年）。

Murphy, A. E. [2009] *John Law: Economic Theorist and Policy Maker,* Oxford, Oxford University Press.

O'Driscoll, G. P. [1986] "Money: Menger'evolutionary theory," *History of Political Economy*, Vol. 18, No. 4 (Winter), pp. 601–616.

Pigou, A. C. [1950] *The Veil of Money*, London, Macmillan. (first edition 1949).

Schumpeter, Joseph A. [1954] *History of Economic Analysis*, New York, Oxford University Press.（東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』（上）（中）（下）2006年）。

Shakespeare, William [1623] *A Midsummer Night's Dream*,（大場健治訳『真夏の夜の夢』研究社，2010年）。

Smit, J. P., Filip Buekens, and Stan du Plesseis [2011] "What is Money ？ An Alternative to Searle's Institutional Facts", *Economics and Philosophy*, Vol. 27, No. 1, pp. 1–22.

Smith, Adam [1789] *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, in three volumes, the fifth edition, London, A. Strahan and T. Cadell.（大河内一男監訳『国富論Ⅰ』中央公論社，1992 年）。

Sweezy, Alan. R. [1934] "The Interpretation of Subjective Value Theory in the Writings of the Austrian Economists," *Review of Economic Studies*, Vol. 1, No. 3, pp. 176–185.

Vanderlint. Jacob [1734] *Money answers all Things,* East Ardsley, Wakefield, Yorkshire S. R. Publishers Ltd.（浜林正夫・四元忠博訳『貨幣万能』東京大学出版会，1977 年）。

Walker. F. A. [1878] *Money*, New York, Henry Holt & Company (Reprinted by Augustus M. Kelley, Publishers, New York, 1968).

Wieser, F. [1904] "Der Geldwert undseine geschichtlichen Verānderungen," Antritts Voleswirtschaf, gehalten am 26, Okt, an der Wiener Universitāt, Zeitschrift fūr Volkswirtshaft, Sozialpolitik und Verwaltung, Ⅷ. Bd., Gesa Gesammelte Abhandlungen, S. 164–192 im Hanörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Aufl, Ⅳ, Bd. Jena, S. 681–717.（安田充訳『貨幣論集』第 2 章「貨幣の価値とその歴史的変動」有斐閣，1941 年）。

石倉雅男［2012］『貨幣経済と資本蓄積の理論』大月書店。

伊藤　誠・C. ラパヴィツァス［2002］『貨幣・金融の政治経済学』岩波書店。

岩井克人［1993］『貨幣論』筑摩書房。

岡田裕之［1998］『貨幣の形成と進化：モノからシンボルへ』法政大学出版局。

高田保馬［1931］『経済学新講第 3 巻（貨幣の理論）』岩波書店。

降旗節雄［1976］『マルクス経済学の理論構造』筑摩書房。

古川　顕［2012］『R. G. ホートレーの経済学』ナカニシヤ出版。

古川　顕［2014］『テキストブック　現代の金融』（第 3 版）東洋経済新報社。

古川　顕［2015a］「ジョン・ローの貨幣理論」『甲南経済学論集』第 55 巻第 3・4 号，211–271 ページ。

古川　顕［2015b］「ジョン・ローのマクロ経済理論」『経済論叢』第 189 巻第 2 号，1–18 ページ。

八木紀一郎［1988］「1871 年以降のカール・メンガー」（『オーストリア経済思想史研究』名古屋大学出版会，所収）。

八木紀一郎［1990］「メンガー『経済学原理』の成立」『経済論叢』，第 146 巻第 1 号。

山口重克［1985］『経済原論講義』東京大学出版会。

吉沢英成［1981］『貨幣と象徴』日本経済新聞社。